

中国の大学生

南京木屑(ナンジンムーシエ)(1)

菊 崎 威

会員の菊崎威さんは、いま南京の大学で日本語を教えている。この春、新潟の県立高校を退職して八月末から中国に渡られた。中国の教育事情を主に数回報告して頂く、ご愛読を乞う。

(編集部)

入学式

9月10日(水)は入学式であった。学内には赤地に新入生歓迎の言葉を白く抜いた無数の横断幕が路上に掲げられ、赤、黄、緑、桃、青色の旗がこれも10m間隔くらいに何本も道路わきに立てられている。

入学式と言っても、何かセレモニーがあるわけでもなく、新入生の初登校の日であるようで、新入生とその父母、なかには祖父母も含めて朝から晩まで次々と学内に入ってくる。高級自動車で乗りつける家族もいれば(そういう家族は、わが外教楼にひとまず宿泊)、公共バスで正門まで来て、そこからトランクをころころ引きずって広い学内をいく家族もいる。バス停や至る所にガイド役の上級生がいて、一族あるいは二家族ごとに、おそらく学生寮だろう、案内していく。いずれにしろ、同じ方向への人の波が早朝から途絶えない。喧騒この上ない。面白いのは、案内の上級生と並んで話しているのは父親で、新入生本人と母親は後からついていく風景がほとんどだと言うこと。日本なら

母親が先頭だろうか。

11日はオリエンテーションだろうか、上級生の持つ学部旗を先頭に集団が朝からぞろぞろ学内の至る所を歩いている。文徳楼（いわゆる文学部の建物）の前では一クラスくらいが集団がいくつも、何の順番待ちかわからないが、たむろしている。教科書の配布も外で行われている。

12日も何があるか分からないが、学部旗や看板の後をぞろぞろついていく新生生の群れに幾つも出会った。今週はこんなことが続くのだろう。案内の学生は大変だ。（授業中、彼らはラッキーだねと言ったら、みんな笑ったが……）ともかく、一気に人口が増加した。ころなしか以前より騒々しくなった気がする。携帯電話、パソコン、自転車販売店が急遽出店。学内のスパーも日常雑貨を買う新入生とその親でこた返している。そして1000元紙幣が乱れ飛んでいる。

それにしても、親の姿をまだ見る。いったいいつまでいるのだろうか。市内観光なのか、今朝もタクシーで出かけた家族もいた。そう言えは、二年生の曹慶が言っていた。去年、入学式にやってきた母親が別れるとき涙を流した、と。大事なだいな一人っ子。別れ難い

のだろう。

ところで、この南京通信。漱石の『木屑録』にあやかって、『南京木屑 (nanjingmuxie) ナンジンムーシエ』としよう。



新入生で賑わう大学の校内 撮影：菊埜

トラブルその1

濱江学院の教室は3人がけの椅子が10脚ほど3列並んでいる。そしてパソコンとプロジェクターが格納

されている大きな教壇がある。パソコンを使用する場合、教壇の手前にある感知機様のところに、縦3cm横2cm厚さ2mmほどのプラスチック製のタグ様の物を当てる、ボタンと大きな音がして手前の扉が開きメインスイッチやUSBを差し込むハードが現れる。教壇の左側上部にはディスプレイが格納されていて、天板が開きディスプレイやキーボードが持ち上がってくる。右側上部にはプロジェクターが格納されている。授業中、誤って、このプロジェクターを持ち上げるスイッチを押してしまい、天板の上に置いてあった管理ノートやチョーク、それに電子辞書を落としてしまった。ボタンと大きな音はするし、チョークはばらばらと落ちるし、大事な管理ノート（各授業時に担当教官がクラスや出席人数、施設設備の状況等を記入する冊子）もしわくちゃになるしで、大いに慌て、見ていた学生も大慌てで修復を手伝ってくれた。そんな大騒ぎであったために、電子辞書が落ちたことにトンと気づかずに帰ってしまった。

辞書の無いことに気づき、はつと思いが当たったのが上記の事件。もう夜になっていたが、アシスタントの楊さんに来てもらい、二人で濱江へ。宿直のおじさん

に教室の鍵を開けてもらって無事辞書を救出。楊さんは汗だくで駆け回ってくれた。

トラブルその2

7日(日)に妻は二人の学生に伴われて南京市内の観光に行った。帰りのバス停の人混みの中でジーンの前ポケットに入れてあった携帯電話(国際電話ができるように高い金を出してわざわざ買ったもの)を失くしてしまった。バスに乗ろうとしての押し合いへし合いの中で落としたのか抜き取られたのか、バスにやつの思いで乗って落ち着いてから気がついたのだが、後の祭り。学生二人は自分たちの注意が足りなくて申し訳ないとさかんに謝ってくれた。帰って、ドコモへの連絡に二人は大汗をかいてくれた。へ／＼(PAN) (ドコモへは結局、娘に電話して向こうで連絡してもらった)。

翌日、盗難届けを出したほうがいいということで、市内の公安まで張さんが妻にまた付き合ってくれた。張さん曰く「日本語でしゃべっていたり、辞書を見ていたから狙われていたのかもしれない」。公安では若い警官が快く応じてくれたそうだ。

ところが、受け取ってきた盗難届けの写しが間違っ

ていたために、夕方、公安らしきところから私の携帯に2度電話がかかってくる。最初は何のことか分からなかったので、「チン・ブ・トン」。2度目は英語交じり。それで公安だろうと見当をつけ、用件を張さんに聞いてもらおうと思ひ、「我朋友、以后、打电话、好吗？」と言ったら、「好的、好的」何とか通じたようだ。結局、翌日、張さんが一人で取りに行ってくれた。本当に謝謝！

△愛すべき学生たち▽

陶书鑫（タオシユウシン）

今日は中秋節。昼間はよく晴れ上がっていたが、夕方から少し雲が出てきた。月は無理かな…

今朝8時に濱江の陶书鑫が妻を迎えに来た。彼女は4日前にやって来て熱心に教科書の言葉について質問をしていった学生だ。実に気さくで遠慮なくものを言う子で、飾り気が無くこちらも気が置けなくてよい。前任者のNさんご推奨の学生だ。夕食一緒に餃子を食べに行ったのだが、その時の約束に料理をしようというのだ。二人で大工厂（大学から自転車で20分ほどの町）へ食材調達に行った。



大学の宿舎 右が陶书鑫 撮影：菊崎

10時半頃帰宅し、早速二人で台所に立った。彼女は母親が働いているので、小さい頃からよく食事を作っていたとかで、包丁裁きも手馴れたもので、大きなピーマンを切り、皮の部分に軽く包丁を入れ、背でたたき、生姜を上階の英語教師マーガレット（僕が「マーガレット」と言うと「マーガレット（うまく表記できないが）、

先生の英語おかしいよ」と笑う。母音はしつかり発音するが、子音はうまくできない我ら……からもらつてきて、塩と砂糖で味付けし炒めてくれた。あつさり味でうまい。

妻の作ったインゲンの胡麻和え、トマト（妻が塩をかけたら、「えーっ！砂糖じゃないの？」と驚く。もつとも亡き母の実家の諏訪ではトマトに砂糖をかけて食べていた）、日本から持参のコシヒカリで昼食。「ご飯おいしいでしょう」と言うと、「中国と同じよ」。こちらも粘つて「でも有粘性」それでも「同じよ」。中国米もいろいろあるか。朝作つた大根と人参、しいたけ、サツマイモの煮物を「これはおいしいよ。日本の味だ。食べてごらん」とすすめると、あまりおいしそうには食べない。「おいしいでしょー」「ウンウン」と笑う。好みの味ではないようだ。僕には殊の外おいしいのだが…。

「国慶節はどうする？帰るの？」「帰るよ。でも切符取れなかつたら…寮」「火車で4〜5時間。遠いよ。南通からバスで1時間。ここ」と地図を指差す。南通市の南の郊外、長江近くの南通農場。「田舎よ。一緒に行く？」「うん、いつか行きたいね」。

しばらく、言葉の学習（私の発音をすぐ咎め、笑つて直してくれる）をし、来週はコロツケを作ることをして約束して帰る。「火曜日、テストだよ」「大丈夫。私一日あれば大丈夫！」

本当に飾らない、話をしていても肩のこらないいい子だ。いたずらっぽい笑顔がなんともいえない愛すべき四年生だ。

（つづく）

